

『劔南詩鈔』に収録された陸游の絶句

三野 豊 浩

〔要旨〕

清の呉之振（一六四〇～一七一七）らが編集した『宋詩鈔』は、宋代の代表的な詩人たちの名作を網羅した大規模な選集であり、宋詩研究における基本参考文献の一つである。その中の『劔南詩鈔』は、南宋最大の詩人陸游（一一二五～一二一〇）の詩集『劔南詩稿』八十五卷の抜粋であり、陸游の詩を合計九八三首収録している。集外詩を別にすれば、『劔南詩稿』に収録されている陸游の詩は合計九一三五首であるから、『劔南詩鈔』は、実にその10%強の作品を収録していることになる。その中には古詩・律詩・絶句など各種の形式が一通り含まれているが、本稿はその中から特に絶句形式の作品（同じ字数の四句から成る作品を一律に絶句と見なし、平仄については不問とした）のみを選び出し、錢仲聯氏の『劔南詩稿校注』（一九八五年九月、上海古籍出版社。以下『校注』と略記）と対照の上、『劔南詩稿』に

おける巻数、制作の時期及び地点、詩人の年齢、『宋詩鈔』及び『校注』における冊数、頁数などをチェックし、整理したものである。頁数は、詩題の載っている頁数を基準とした。連作の場合は、全体の作品数と、連作の第何首にあたるかを、あわせて記した。『宋詩鈔』と『校注』とで詩題の表記に異なる場合は、その所在について記した。『劔南詩鈔』は、一九八六年十二月、中華書局発行の『宋詩鈔』第二冊に収録されているものを底本とした。表記は、新字新仮名遣いとした。

収録された絶句の大部分は七言絶句で、ごく少数ではあるが、五言絶句と六言絶句も含まれている。そこで本稿ではまず七言絶句について記し、その後に五言絶句と六言絶句について付記した。

〔キーワード〕中国古典文学、宋詩、南宋、陸游、絶句、『劔南詩稿』、『宋詩鈔』

七言絶句

筆者の集計によれば、『劔南詩稿』に収録されている陸游の七言絶句は、合計二一五四首である。『劔南詩鈔』に収録されている陸游の七言絶句は合計二二三首であるから、陸游の七言絶句の10%強が収録されていることになる。その内訳は、三代く四十代の詩が五首、五十代の詩が二十四首、六十代の詩が三十六首、七十代の詩が六十八首、八十代の詩が九十首で、晩年の作品ほど占める比重が大きくなっている。

001 東陽道中〔東陽の道中〕(巻二)

紹興三十年(一一六〇)、東陽にて。陸游三十六歳。『宋詩鈔』第二冊、一八二二頁。以下『宋詩鈔』はすべて第二冊。『校注』第一冊、三十八頁。

002 東陽觀醪醕〔東陽にて醪醕を観る〕(巻二)

紹興三十年(一一六〇)、東陽にて。陸游三十六歳。『宋詩鈔』一八二二頁。『校注』第一冊、三十八頁。

003 盆池〔盆池〕(巻二)

隆興元年(一一六三)秋、山陰にて。陸游三十九歳。『宋詩鈔』一八二二頁。『校注』第一冊、六十六頁。

004 聞杜鵑戲作〔杜鵑を聞きて戯れに作る〕(巻三)

乾道八年(一一七二)春、閬中にて。陸游四十八歳。『宋詩鈔』一八三〇頁。『校注』第一冊、二二三頁。『校注』では「戲作」の下に「絶句」の二字がある。

005 老君洞〔老君の洞〕(巻三)

乾道八年(一一七二)春、大安にて。陸游四十八歳。『宋詩鈔』一八三〇頁。『校注』第一冊、二二九頁。

006 太平花〔太平花〕(巻五)

淳熙元年(一一七四)秋七月、蜀州にて。陸游五十歳。『宋詩鈔』一八三八頁。『校注』第一冊、四四六頁。

007 秋夜池上作〔秋夜 池上の作〕(巻五)

淳熙元年(一一七四)秋八月、蜀州にて。陸游五十歳。『宋詩鈔』一八三九頁。『校注』第一冊、四五三頁。

- 008 夜食炒栗有感〔夜 炒栗を食いて感有り〕（巻五）
淳熙元年（一一七四）秋九月、成都にて。陸游五十歳。『宋詩鈔』一八三九頁。『校注』第二冊、四六八頁。
- 009 〓 014 花時遍遊諸家園〔花時 遍く諸家の園に遊ぶ〕（巻六）
十首連作の第一首 〓 第五首、及び第八首。淳熙三年（一一七六）春二月、成都にて。陸游五十二歳。『宋詩鈔』一八四〇頁。『校注』第二冊、五三八頁。
- 015 雨中山行至松風亭忽澄霽〔雨中 山行して松風亭に至るに、忽ち澄み霽る〕（巻八）
淳熙四年（一一七七）秋八月、邛州にて。陸游五十三歳。『宋詩鈔』一八四五頁。『校注』第二冊、六八六頁。
- 016 龍興寺弔少陵先生寓居〔龍興寺にて少陵先生の寓居を弔う〕（巻十）
淳熙五年（一一七八）夏四月、忠州にて。陸游五十四歳。『宋詩鈔』一八四八頁。『校注』第二冊、七八四頁。
- 017 楚城〔楚城〕（巻十）
淳熙五年（一一七八）夏五月、歸州にて。陸游五十四歳。『宋詩鈔』一八四八頁。『校注』第二冊、七九〇頁。
- 018 〓 019 冬夜聽雨戲作〔冬夜 雨を聴きて戯れに作る〕（巻十）
二首連作のすべて。淳熙五年（一一七八）冬十月、山陰にて。陸游五十四歳。『宋詩鈔』一八五二頁。『校注』第二冊、八三五頁。
- 020 〓 023 梅花絶句〔梅花絶句〕（巻十）
十首連作の第四首、第五首、第八首、第九首。淳熙五年（一一七八）冬十二月、建安にて。陸游五十四歳。『宋詩鈔』一八五二頁。『校注』第二冊、八四六頁。
- 024 聞雁〔雁を聞く〕（巻十二）
淳熙七年（一一八〇）春正月、撫州にて。陸游五十六歳。『宋詩鈔』一八五三頁。『校注』第二冊、九四二頁。
- 025 〓 029 寄題朱元晦武夷精舍〔朱元晦の武夷精舍に寄せ題す〕
淳熙五年（一一七八）夏四月、忠州にて。陸游五十四歳。『宋詩鈔』一八四八頁。『校注』第二冊、七八四頁。

(巻十五)

五首連作のすべて。淳熙十年(一一八三)秋九月、山陰にて。陸游五十九歳。『宋詩鈔』一八六八頁。『校注』第三冊、一二〇一頁。

030 郷人或病予詩多道蜀中遊樂之盛適春日遊鏡湖共請賦山陰風物遂即杯酒間作絕句当持以誇西州故人也〔郷人の或るひと予の詩多く蜀中の遊樂の盛んなるを道^いうを病む。適^{たま}たま春日鏡湖に遊び、共に山陰の風物を賦^たさんことを請う。遂に即ち杯酒の間に絶句を作る。当に持して以て西州の故人に誇るべきなり〕(巻十六)

四首連作の第二首、第二首。淳熙十一年(一一八四)春、山陰にて。陸游六十歳。『宋詩鈔』一八六〇頁。『校注』第三冊、一二六〇頁。『校注』は「絶句」を「四絶句」に、「当」を「却当」に、それぞれ作る。

032 飲張功父園戲題扇上〔張功父の園に飲し、戯れに扇上に題す〕(巻十七)

淳熙十三年(一一八六)春、臨安にて。陸游六十二歳。『宋詩鈔』一八六四頁。『校注』第三冊、一三五〇頁。

033 聞傅氏莊紫笑花開急棹小舟觀之〔傅氏の莊の紫笑花開くと聞き、急ぎ小舟に棹さして之を觀る〕(巻十七)

淳熙十三年(一一八六)春、山陰にて。陸游六十二歳。『宋詩鈔』一八六四頁。『校注』第三冊、一三六〇頁。

034 拜日表〔日表を拜す〕(巻十八)

淳熙十三年(一一八六)秋、嚴州にて。陸游六十二歳。『宋詩鈔』一八六六頁。『校注』第三冊、一三九〇頁。

035 雪中忽起從戎之興戲作〔雪中忽ち從戎の興起こり、戯れに作る〕(巻十八)

四首連作の第一首。淳熙十三年(一一八六)冬十二月、嚴州にて。陸游六十二歳。『宋詩鈔』一八六七頁。『校注』第三冊、一四二九頁。

036 冬夜聞角声〔冬夜角声を聞く〕(巻十九)

二首連作のすべて。淳熙十四年(一一八七)冬、嚴州にて。陸游六十三歳。『宋詩鈔』一八六九頁。『校注』第三冊、一四七

八頁。

038 重午〔重午〕(卷二十一)

紹熙元年(一一九〇)夏、山陰にて。陸游六十六歳。『宋詩鈔』一八七四頁。『校注』第三冊、一六〇八頁。

039 〓 044 春雨絶句〔春雨絶句〕(卷二十二)

六首連作のすべて。紹熙二年(一一九二)春、山陰にて。陸游六十七歳。『宋詩鈔』一八七六頁。『校注』第四冊、一六四一頁。

045 〓 047 秋晚思梁益旧遊〔秋晚 梁益の旧遊を思う〕(卷二十三)

三首連作のすべて。紹熙二年(一一九二)秋、山陰にて。陸游六十七歳。『宋詩鈔』一八七九頁。『校注』第四冊、一七〇三頁。

048 觀梅至花溼高瑞叔解元見尋〔梅を觀て花溼に至り、高瑞叔解元に尋ねらる〕(卷二十四)

二首連作の第二首。紹熙三年(一一九二)春、山陰にて。陸游六十八歳。『宋詩鈔』一八八〇頁。『校注』第四冊、一七三九頁。

049 〓 054 春晚村居雜賦絶句〔春晚 村居して絶句を雜賦す〕(卷二十四)

六首連作のすべて。紹熙三年(一一九二)春、山陰にて。陸游六十八歳。『宋詩鈔』一八八一頁。『校注』第四冊、一七五五頁。

055 〓 056 秋夜将曉出籬門迎涼有感〔秋夜 将に曉ならんとし、籬門を出で涼を迎えて感有り〕(卷二十五)

二首連作のすべて。紹熙三年(一一九二)秋、山陰にて。陸游六十八歳。『宋詩鈔』一八八三頁。『校注』第四冊、一七七四頁。

057 〓 059 秋日郊居〔秋日の郊居〕(卷二十五)

八首連作の第三首、第五首、第七首。紹熙三年(一一九二)秋、山陰にて。陸游六十八歳。『宋詩鈔』一八八三頁。『校注』第四冊、一七八一頁。

060 夜読范至能攬轡録言中原父老見使者多揮涕感其事作絶句〔夜 范至能の攬轡録を讀むに、言う、中原の父老 使者を見て多く涕を揮うと。其の事に感じて絶句を作る〕(卷二十五)

紹熙三年（一一九二）冬、山陰にて。陸游六十八歳。『宋詩鈔』一八八五頁。『校注』第四冊、一八三二頁。

061 十一月四日風雨大作（十一月四日 風雨 大いに作る）（卷二十六）

二首連作の第二首。紹熙三年（一一九二）冬、山陰にて。陸游六十八歳。『宋詩鈔』一八八五頁。『校注』第四冊、一八二九頁。

062 病起（病より起く）（卷二十六）

紹熙三年（一一九二）冬、山陰にて。陸游六十八歳。『宋詩鈔』一八八六頁。『校注』第四冊、一八三一頁。

063 春社（春社）（卷二十七）

四首連作の第四首。紹熙四年（一一九三）春、山陰にて。陸游六十九歳。『宋詩鈔』一八八七頁。『校注』第四冊、一八八三頁。

064 〓 065 排悶（悶えを排す）（卷二十八）

六首連作の第三首、第四首。紹熙四年（一一九三）秋、山陰にて。陸游六十九歳。『宋詩鈔』一八九一頁。『校注』第四冊、

一九二九頁。

066 〓 074 三峽歌（三峽の歌）（卷三十）

九首連作のすべて。紹熙五年（一一九四）冬、山陰にて。陸游七十歳。『宋詩鈔』一八九六頁。『校注』第四冊、二〇六八頁。

075 〓 078 雜詠園中菓子（園中の菓子を雜詠す）（卷三十一）

四首連作のすべて。紹熙五年（一一九四）冬、山陰にて。陸游七十歳。『宋詩鈔』一八九八頁。『校注』第四冊、二〇九一頁。

079 〓 081 春晚懷山南（春晚 山南を懷う）（卷三十二）

四首連作の第一首、第二首、第四首。慶元元年（一一九五）春、山陰にて。陸游七十一歳。『宋詩鈔』一九〇〇頁。『校注』第四冊、二二二八頁。

082 〓 083 齋中雜題（齋中の雜題）（卷三十二）

四首連作の第一首、第三首。慶元元年（一一九五）春、山陰にて。陸游七十一歳。『宋詩鈔』一九〇一頁。『校注』第四冊、二二三三頁。

084～085 十月十七日予生日也孤村風雨蕭然偶得二絶句予生淮上

是日平旦大風雨駭人及予墮地雨乃止（十月十七日は予の生日なり。孤村に風雨 蕭然として、偶たま二絶句を得たり。予 淮上に生まる。是の日 平旦に大風雨ありて人を駭かすに、予の地に墮つるに及びて雨 乃ち止めり）（卷三十三）

二首連作のすべて。慶元元年（一一九五）冬、山陰にて。陸游七十一歳。『宋詩鈔』一九〇二頁。『校注』第四冊、二一九九頁。『校注』では「予生」の下に「於」字がある。

086～087 懷旧（懷旧）（卷三十四）

六首連作の第三首、第四首。慶元二年（一一九六）春、山陰にて。陸游七十二歳。『宋詩鈔』一九〇四頁。『校注』第五冊、二二三五頁。

088～092 醉中信筆作四絶句既成懼觀者不知野人本心也復作一絶（醉中 筆に信せて四絶句を作る。既に成り、觀る者の野人の本心を知らざらんことを懼れ、復た一絶を作る）（卷三十五）

五首連作のすべて。慶元二年（一一九六）冬、山陰にて。陸游七十二歳。『宋詩鈔』一九〇六頁。『校注』第五冊、二二九六頁。

093 立春日（立春の日）（卷三十五）

二首連作の第一首。慶元三年（一一九七）春、山陰にて。陸游七十三歳。『宋詩鈔』一九〇七頁。『校注』第五冊、二二〇六頁。

094～097 雜感（雜感）（卷三十六）

十首連作の第一首、第四首、第七首、第九首。慶元四年（一一九八）春、山陰にて。陸游七十四歳。『宋詩鈔』一九〇九頁。『校注』第五冊、二三五四頁。

098～099 太息（太息）（卷三十七）

四首連作の第三首、第四首。慶元四年（一一九八）秋、山陰にて。陸游七十四歳。『宋詩鈔』一九一二頁。『校注』第五冊、二四一三頁。

100 白樂天詩云倦倚繡床愁不動緩垂綠帶髻鬟低遼陽春尽無消息夜合花前日又西好事者画之為倦繡図此花以五六月開山中多于茨棘人殊不貴之為賦小詩以寄感嘆（白樂天の詩に云う、「倦みて繡床に倚るも愁いは動かず、緩やかに緑帯を垂れて髻鬟は低し。遼陽 春尽くるも消息無く、夜合花前 日 又た西

す」と。事を好む者 之を画きて倦繡図と為す。此の花 五
六月を以て山中に開くも、茨棘多きがゆえに、人 殊に之を
貴ばず。為に小詩を賦し、以て感嘆を寄す」(卷三十九)

慶元五年(一一九九)夏、山陰にて。陸游七十五歳。『宋詩鈔』
一九一三頁。『校注』第五冊、二五〇五頁。

101～103 春日〔春日〕(卷四十二)

六首連作の第二首、第五首、第六首。慶元六年(一二〇〇)春
山陰にて。陸游七十六歳。『宋詩鈔』一九一九頁。『校注』第五
冊、二六四六頁。

104 夜行過一大姓家值其樂飲戲作〔夜 行きて一大姓の家を過
ぎ、其の樂飲に値あいて戯れに作る〕(卷四十二)

慶元六年(一二〇〇)春、山陰にて。陸游七十六歳。『宋詩鈔』
一九一九頁。『校注』第五冊、二六四九頁。

105 追感往事〔往事を追感す〕(卷四十五)

五首連作の第五首。嘉泰元年(一二〇二)春、山陰にて。陸
游七十七歳。『宋詩鈔』一九二四頁。『校注』第五冊、二七七九頁。

106 紹興辛酉予年十七矣距今已六十年追感旧事作絶句〔紹興の
辛酉、予年十七なり。今を距つること已に六十年、旧事を追
感して絶句を作る〕(卷四十五)

嘉泰元年(一二〇二)春、山陰にて。陸游七十七歳。『宋詩鈔』
一九二四頁。『校注』第五冊、二七八四頁。

107～108 雨晴風日絶佳徙倚門外〔雨晴れて風日絶はなはだ佳よく、門外
に徙倚しす〕(卷四十五)

三首連作の第二首、第三首。嘉泰元年(一二〇二)春、山陰
にて。陸游七十七歳。『宋詩鈔』一九二五頁。『校注』第五冊、
二七八五頁。

109 衡門〔衡門〕(卷四十六)

嘉泰元年(一二〇二)夏、山陰にて。陸游七十七歳。『宋詩鈔』
一九二六頁。『校注』第六冊、二八〇三頁。

110～113 追憶征西幕中旧事〔征西幕中の旧事を追憶す〕(卷四
十八)

四首連作のすべて。嘉泰元年（一一二〇）冬、山陰にて。陸游七十七歳。『宋詩鈔』一九三三頁。『校注』第六冊、二九二六頁。

114～119 梅花絶句〔梅花絶句〕（卷五十）

六首連作のすべて。嘉泰二年（一一二〇）春、山陰にて。陸游七十八歳。『宋詩鈔』一九三五頁。『校注』第六冊、二九七九頁。

120～121 題廬陵蕭彥毓秀才詩卷後〔廬陵の蕭彥毓秀才の詩卷の後に題す〕（卷五十）

二首連作のすべて。嘉泰二年（一一二〇）春、山陰にて。陸游七十八歳。『宋詩鈔』一九三七頁。『校注』第六冊、三〇二〇頁。

122～124 閑詠園中草木〔閑に園中の草木を詠ず〕（卷五十二）

六首連作の第一首、第三首、第四首。嘉泰二年（一一二〇）夏、山陰にて。陸游七十八歳。『宋詩鈔』一九三八頁。『校注』第六冊、三〇三七頁。

125～126 謝韓美之直閣送灯〔韓美之直閣の灯を送るに謝す〕（卷五十二）

二首連作のすべて。嘉泰二年（一一二〇）冬、臨安にて。陸游七十八歳。『宋詩鈔』一九四一頁。『校注』第六冊、三二〇三頁。

127～131 春日絶句〔春日絶句〕（卷五十三）

八首連作の第一首、第四首、第五首、第六首、第八首。嘉泰三年（一一二〇）春、臨安にて。陸游七十九歳。『宋詩鈔』一九四四頁。『校注』第六冊、三二三七頁。

132～133 对食戯作〔食に対して戯れに作る〕（卷五十六）

六首連作の第一首、第三首。嘉泰三年（一一二〇）冬、山陰にて。陸游七十九歳。『宋詩鈔』一九四八頁。『校注』第六冊、三二六八頁。

134～137 書事〔事を書す〕（卷五十八）

四首連作のすべて。嘉泰四年（一一二〇）秋、山陰にて。陸游八十歳。『宋詩鈔』一九五二頁。『校注』第六冊、三三六九頁。

138～140 甲子秋八月偶思出遊往累日不能帰或遠至傍泉凡得絶句十有二首雜録入稿中亦不復詮次也〔甲子の秋八月 偶たま出遊せんことを思い、往往にして累日帰ること能わず。或る

とき遠く傍県に至り、凡そ絶句十有二首を得たり。雑録して稿中に入れ、亦た復た詮次せざるなり」(巻五十八)

十二首連作の第三首、第五首、第六首。嘉泰四年(一二〇四)秋、山陰にて。陸游八十歳。『宋詩鈔』一九五四頁。『校注』第六冊、三三九〇頁。

141～144 感昔〔昔に感ず〕(巻五十九)

五首連作の第一首～第四首。嘉泰四年(一二〇四)秋、山陰にて。陸游八十歳。『宋詩鈔』一九五五頁。『校注』第七冊、三三九九頁。

145～148 農舎〔農舎〕(巻五十九)

四首連作のすべて。嘉泰四年(一二〇四)秋、山陰にて。陸游八十歳。『宋詩鈔』一九五六頁。『校注』第七冊、三四一一頁。

149～153 感昔〔昔に感ず〕(巻六十)

七首連作の第二首～第五首、及び第七首。嘉泰四年(一二〇四)冬、山陰にて。陸游八十歳。『宋詩鈔』一九五八頁。『校注』第七冊、三四五五頁。

154 枯菊〔枯菊〕(巻六十二)

二首連作の第一首。開禧元年(一二〇五)春、山陰にて。陸游八十一歳。『宋詩鈔』一九六〇頁。『校注』第七冊、三四八四頁。

155 暮春〔暮春〕(巻六十二)

四首連作の第二首。開禧元年(一二〇五)春、山陰にて。陸游八十一歳。『宋詩鈔』一九六一頁。『校注』第七冊、三五二二頁。

156～158 秋懷〔秋懷〕(巻六十二)

四首連作の第二首～第四首。開禧元年(一二〇五)秋、山陰にて。陸游八十一歳。『宋詩鈔』一九六三頁。『校注』第七冊、三五六五頁。

159～162 貧甚戯作絶句〔貧 甚だしく、戯れに絶句を作る〕(巻六十三)

八首連作の第二首～第四首、及び第八首。開禧元年(一二〇五)秋、山陰にて。陸游八十一歳。『宋詩鈔』一九六四頁。『校注』第七冊、三五七八頁。

163～164 夢中作〔夢中の作〕（卷六十四）

二首連作のすべて。開禧元年（一二〇五）九月、山陰にて。陸游八十一歳。『宋詩鈔』一九六八頁。『校注』第七冊、三六三三頁。

165～166 初冬絶句〔初冬絶句〕（卷六十四）

二首連作のすべて。開禧元年（一二〇五）九月、山陰にて。陸游八十一歳。『宋詩鈔』一九六八頁。『校注』第七冊、三六三八頁。

167～168 題詹仲信所藏米元暉雲山小幅〔詹仲信藏する所の米元暉の雲山の小幅に題す〕（卷六十四）

二首連作のすべて。開禧元年（一二〇五）冬、山陰にて。陸游八十一歳。『宋詩鈔』一九六八頁。『校注』第七冊、三六五一頁。

169～170 山村経行因施薬〔山村を経行し、因りて薬を施す〕（卷六十五）

五首連作の第二首、第五首。開禧元年（一二〇五）冬、山陰

にて。陸游八十一歳。『宋詩鈔』一九七〇頁。『校注』第七冊、三六七三頁。

171～172 雜題〔雜題〕（卷六十六）

四首連作の第二首、第四首。開禧二年（一二〇六）春、山陰にて。陸游八十二歳。『宋詩鈔』一九七四頁。『校注』第七冊、三七二五頁。

173～176 縦遊深山随所遇記之〔深山を縦遊し、遇う所に随したがいて之を記す〕（卷六十七）

四首連作のすべて。開禧二年（一二〇六）夏、山陰にて。陸游八十二歳。『宋詩鈔』一九七八頁。『校注』第七冊、三七八三頁。

177～181 秋興〔秋興〕（卷六十八）

十二首連作の第三首、第六首、第八首、第十首、第十二首。開禧二年（一二〇六）秋、山陰にて。陸游八十二歳。『宋詩鈔』一九八一頁。『校注』第七冊、三八一〇頁。

182 感旧〔感旧〕（卷六十九）

二首連作の第二首。開禧二年（一二〇六）冬、山陰にて。陸游八十二歳。『宋詩鈔』一九八五頁。『校注』第七冊、三八六二頁。

183～184 春晚即事〔春晚即事〕（卷七十）

四首連作の第一首、第四首。開禧三年（一二〇七）春、山陰にて。陸游八十三歳。『宋詩鈔』一九八八頁。『校注』第七冊、三九二〇頁。

185～187 雜詠〔雜詠〕（卷七十二）

十首連作の第二首、第三首、第四首。開禧三年（一二〇七）夏、山陰にて。陸游八十三歳。『宋詩鈔』一九八八頁。『校注』第七冊、三九二四頁。

188～190 秋晚雜興〔秋晚の雜興〕（卷七十二）

十二首連作の第二首～第四首。開禧三年（一二〇七）秋、山陰にて。陸游八十三歳。『宋詩鈔』一九八九頁。『校注』第七冊、三九六一頁。

191～192 秋思〔秋思〕（卷七十二）

十首連作の第七首、第九首。開禧三年（一二〇七）秋、山陰にて。陸游八十三歳。『宋詩鈔』一九九一頁。『校注』第七冊、三九九九頁。

193 閑遊〔閑遊〕（卷七十六）

二首連作の第二首。嘉定元年（一二〇八）夏、山陰にて。陸游八十四歳。『宋詩鈔』一九九八頁。『校注』第八冊、四一五七頁。

194～195 読史〔史を読む〕（卷七十七）

四首連作の第二首、第四首。嘉定元年（一二〇八）夏、山陰にて。陸游八十四歳。『宋詩鈔』一九九九頁。『校注』第八冊、四一九六頁。

196～197 仲秋書事〔仲秋に事を書す〕（卷七十八）

十首連作の第一首、第六首。嘉定元年（一二〇八）秋、山陰にて。陸游八十四歳。『宋詩鈔』二〇〇〇頁。『校注』第八冊、四二二九頁。

198～199 聞新雁有感〔新雁を聞きて感有り〕（卷七十八）

二首連作のすべて。嘉定元年（一二〇八）秋、山陰にて。陸游八十四歳。『宋詩鈔』二〇〇二頁。『校注』第八冊、四二六四頁。

200～203 初冬雜詠〔初冬の雜詠〕（卷七十九）

八首連作の第一首、第二首、第四首、第八首。嘉定元年（一二〇八）冬、山陰にて。陸游八十四歳。『宋詩鈔』二〇〇三頁。『校注』第八冊、四二七八頁。

204～205 読唐人愁詩戯作〔唐人の愁いの詩を読みて戯れに作る〕（卷八十）

五首連作の第一首、第二首。嘉定元年（一二〇八）冬、山陰にて。陸游八十四歳。『宋詩鈔』二〇〇四頁。『校注』第八冊、四三一頁。

206～210 春日雜興〔春日の雜興〕（卷八十二）

十二首連作の第三首、第五首、第六首、第八首、第九首。嘉定二年（一二〇九）春、山陰にて。陸游八十五歳。『宋詩鈔』二〇〇五頁。『校注』第八冊、四三五七頁。

211～213 窓下戯詠〔窓下の戯詠〕（卷八十二）

三首連作のすべて。嘉定二年（一二〇九）夏、山陰にて。陸游八十五歳。『宋詩鈔』二〇〇七頁。『校注』第八冊、四四一五頁。

214～218 夏日〔夏日〕（卷八十二）

十二首連作の第一首～第三首、第六首、第七首。嘉定二年（一二〇九）夏、山陰にて。陸游八十五歳。『宋詩鈔』二〇〇八頁。『校注』第八冊、四四二七頁。

219～220 即事〔即事〕（卷八十三）

八首連作の第三首、第七首。嘉定二年（一二〇九）夏、山陰にて。陸游八十五歳。『宋詩鈔』二〇〇九頁。『校注』第八冊、四四四〇頁。

221 湖上晚望〔湖上の晚望〕（卷八十四）

嘉定二年（一二〇九）秋、山陰にて。陸游八十五歳。『宋詩鈔』二〇一〇頁。『校注』第八冊、四四八六頁。

222 残菊〔残菊〕（卷八十五）

嘉定二年（二二〇九）冬、山陰にて。陸游八十五歳。『宋詩鈔』二〇一一頁。『校注』第八冊、四五二五頁。

223 示兒（児に示す）（卷八十五）

嘉定二年（二二〇九）冬十二月、山陰にて。陸游八十五歳。『宋詩鈔』二〇一三頁。『校注』第八冊、四五四二頁。

五言絶句

筆者の集計によれば、『劔南詩稿』に収録されている陸游の五言絶句は、合計二〇一首である。『劔南詩鈔』に収録されている陸游の五言絶句は合計七首で、これは総数の約3%に相当する。その内訳は、六十代の詩が四首、七十代の詩が一首、八十代の詩が二首で、すべてが晩年の作品である。

001～002 癸丑七月二十七日夜夢遊華嶽廟（癸丑の七月二十七日
の夜、夢に華嶽の廟に遊ぶ）（卷二十七）

二首連作。紹熙四年（一一九三）秋、山陰にて。陸游六十九歳。『宋詩鈔』一八八八頁。『校注』第四冊、一九〇二頁。『校注』は「日」字がない。

003～004 古築城曲（古の築城の曲）（卷二十八）

四首連作の第一首、第四首。紹熙四年（一一九三）冬、山陰にて。陸游六十九歳。『宋詩鈔』一八九二頁。『校注』第四冊、一九三九頁。

005 久不得張漢州書（久しく張漢州の書を得ず）（卷二十九）

紹熙五年（一一九四）春、山陰にて。陸游七十歳。『宋詩鈔』一八九四頁。『校注』第四冊、二〇〇二頁。

006～007 欲雨（雨ふらんと欲す）（卷七十七）

二首連作のすべて。嘉定元年（一二〇八）秋、山陰にて。陸游八十四歳。『宋詩鈔』二〇〇〇頁。『校注』第八冊、四二〇六頁。

六言絶句

六言絶句は、宋代の詩人たちが好んで用いた、やや特殊な形式である。筆者の集計によれば、『劔南詩稿』に収録されている陸游の六言絶句は、合計三十七首である。『劔南詩鈔』に収録されている陸游の六言絶句は合計四首で、これは総数の約10%に相当する。その内訳は、七十代の詩が一首、八十代の詩

が三首で、五言絶句の場合と同様、すべてが晩年の作品である。

001 舍北閑望作六字絶句（舍北にて閑望し、六字の絶句を作る）

（卷三十三）

慶元元年（一一九五）冬、山陰にて。陸游七十一歳。『宋詩鈔』

一九〇三頁。『校注』第四冊、二二〇二頁。

002～004 六言雜興（六言雜興）（卷五十六）

九首連作の第四首～第六首。嘉泰四年（一二〇四）春、山陰にて。陸游八十歳。『宋詩鈔』一九五〇頁。『校注』第六冊、三二九五頁。

以上が、『劍南詩鈔』に収録されている陸游の絶句の概要である。これらの作品についての詳細な分析は、今後の課題としたい。

注

（1） 錢鍾書氏は『宋詩選注』の序の中で、宋詩の研究者が『宋詩鈔』及び『宋詩紀事』を使用する際の留意点について指摘している。それによれば、『宋詩鈔』は「巻帙に富む別集については、一般的にみな前半

部分からは多数抄録されているが、後半部分からの抄録が粗略である」という（二〇〇四年一月、平凡社東洋文庫『宋詩選注I』五十四頁）。しかし、『劍南詩鈔』の収録作品は『劍南詩稿』の各巻からほぼ均等に選ばれており、特にこうした問題は存在しないようである。

（2） 村上哲見編『陸游『劍南詩稿』詩題索引』（一九八四年三月、奈良女子大学中国文学会）の前言を参照のこと。村上氏によれば、『劍南詩稿』に収める詩の総数については従来いくつかの説があるが、詩題総数は九一三九首であり、そのうち四首は本文が欠落しているので、詩の実数は九一三五首である、とのことである。なお筆者が『校注』にもとづいて数えてみたところ、やはり同じ結果が得られた。

（3） 『劍南詩鈔』の詩は基本的に『劍南詩稿』の巻数にしたがって配列されているが、若干の例外がある。これらの詩は、『劍南詩稿』では巻十五に収録されているにもかかわらず、『劍南詩鈔』ではなぜか巻十九の詩の間にまじっている。

（4） 宋代における六言絶句の概要については、『宋代文学研究叢刊』第九期（二〇〇三年十二月、麗文文化公司）所収の周裕鍇氏の論文「因難見巧・宋代六言絶句研究」に詳しい。なお同論文の拙訳「宋代六言絶句考―難によつて巧を示す―」が、『橄欖』第十二号（二〇〇四年九月、宋代詩文研究会）に掲載されているので、原文とあわせて参照されたい。